



根室管内の小・中学生を対象に開催される「北方少年少女塾」では、語り部として島の生活や引き揚げの様子とともに、返還運動の大切さを伝える。(写真：上)

平成3年8月に参加した北方墓参で、46年ぶりにふるさとの地床間に立ち、感動と懐かしさに心が震えた。(写真：中)

初めて勇留島に上陸し、墓参ができた喜びに涙する引揚者の姿も見られた。近くて遠い四島の現状に怒りが込み上げる。(写真：下)

北海道立北方四島交流センターで専門員を務める高橋孝志さんは、勇留島からの引揚者である。

終戦を迎えた昭和20年8月、これからは島での平穏な生活が始まると思っていたやさき

平成22年元旦。壁に吊るされた日めくりには、祭日の日の丸が刷り込まれ、新しい年の始まりを告げる。また、一歳を重ねることができた喜びとともに、まだ還らぬふるさと北方領土への思いが湧き上がる。「今年こそは・・・」との期待は、もう若くない元島民には切ない叫びとなっている。

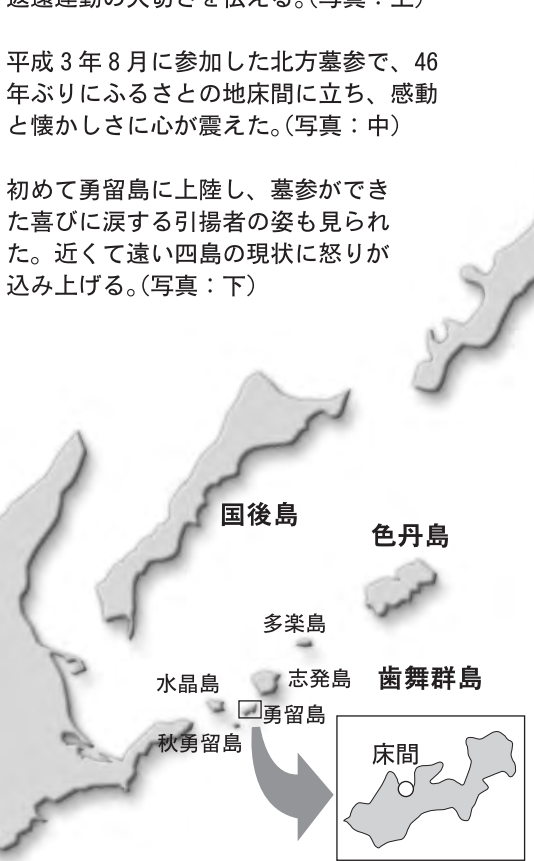
にソ連軍の侵略が始まった。当時、小学校6年生であった高橋さんはもちろん、島の人々はソ連軍の進行を知ることとはなかった。突然の上陸に驚きと恐怖に震えていた。日本軍の武装解除で、ソ連軍はすぐに島を離れるものと思っていたが、ソ連軍が島の住人を労働者として集め出したことで、占領の恐怖心から島からの引き揚げが始まった。

ソ連軍の監視をくぐり抜けるため、暗闇の中に船を出す者や、厳寒の海を埋める流水の隙間を縫うように船をこぐ者もいた。それは大きな危険を伴うものであった。80程あった世帯も徐々に減り、高橋さんの世帯を含め10世帯程が残

され、ソ連の沿岸警備隊と過ごすこととなる。2年後、米・ソの引揚協定により、ソ連の引揚船で強制的に樺太・真岡に収容。2カ月後、日本の引揚船で函館に向かうこととなる。函館では、希望する地に送り届けるとの話しとなったが、島に帰るために一番近い根室管内を希望したのが9割方だった。

このときに味わった恐怖感と悲惨な状況は、年を重ねた今だからこそ話せることであり、語り継がなければならぬ使命を感じるという。

年少女塾」などで、返還運動の後継者の育成に取り組みむ傍ら、全国各地から訪れる観光客や県民会議などの視察では、生の声で島での生活を伝えることが専門員の仕事である。展示物だけでは知ることができない元島民の叫びと島への思いが、聞く者の心を動かし、中には涙する者もいる。返還運動の「語り部」として貴重な存在となっている。



北方領土

択捉島、国後島、色丹島、歯舞群島(貝殻島、水晶島、秋勇留島、勇留島、志発島、多楽島) からの北方四島は、一度も他国の領土となっていない日本固有の領土。

1945(昭和20)年に北方四島がソ連に占拠され、今日に至るまでソ連・ロシアによる不法占拠が続いている。

北方領土問題は日ロ両国間の最大の懸案事項であり、一日も早い解決により真の友好関係が確立されることを望んでいる。

高橋さんは、両親と叔父、兄弟の8人で昆布漁を営み生活を送っていた。すばらしい自然環境と豊かな漁場に恵ま